# ヴァイマル共和国末期の平和運動の諸問題

## ― オシエツキーと『ヴェルトビューネ』をめぐる裁判から ―

竹　本　真希子

## 1．はじめに

オシエツキーとヴァイマル共和国期の組織平和運動

ヴァイマル共和国期ドイツの平和運動史は、これまで運動の主体であった平和組織の活動に重点をおいて述べられてきた[1]。当時最大の平和組織であったドイツ平和協会 Deutsche Friedensgesellschaft や、これを含めた 14 の平和組織の上部団体であったドイツ平和カルテル Deutsches Friedenskartell では、平和主義者たちがヴェルサイユ条約や国際連盟、ドイツの再軍備や兵役拒否といった問題を議論した。当時の平和組織で活動した平和主義者のなかには、大別すると、第一次世界大戦以前からの平和運動の担い手でドイツ民主党に所属した自由主義左派の知識人を中心とする「穏健派」と、第一次世界大戦以降に平和運動に関わった社会主義に近い立場をとる「急進派」と呼ばれるふたつの傾向があった。両派の平和主義者たちは反戦平和デモ「ニー・ヴィーダー・クリーク（戦争はもうごめん）運動 Nie-wieder-Krieg-Bewegung」などで協力し、内政改革にも取り組み、平和を求めた。しかししだいに彼ら両派の見解の相違から生じた溝は深まり、ドイツ平和協会内での権力闘争を経て、両派は分裂した。平和主義がヴァイマル共和国期の社会のなかでコンセンサスとなるには厳しい状況にあったなか、組織の分裂はさらに平和運動を弱体化させた[2]。

筆者はこうしたヴァイマル共和国期の平和運動史の中から、この時期の代表的な平和主義者のひとりであるカール・フォン・オシエツキーCarl von Ossietzky[3]に注目し、彼の平和主義と平和運動における位置について検討した[4]。オシエツキーは急進派に近い立場をとりながらも、当時の平和運動の主流であった組織平和主義には与することができなかった。彼はヴァイマル共和国期の平和運動の問題点、つまり運動が大衆に届かないという点と、組織内の闘争

による平和運動の弱体化という点を指摘し、ドイツ平和協会を中心とした組織平和運動の厳しい批判者としてヴァイマル共和国期の平和運動史に位置した。オシエツキーは共和国の中で周辺に位置した平和主義者の中で、さらにアウトサイダーにならざるをえなかった人物だと位置づけた。

本稿はこれを踏まえたうえで、オシエツキーとドイツ平和運動史での彼の位置について、さらに考察するものである。オシエツキーと組織平和運動との関係に焦点を当てた先の論文では、彼のジャーナリストとしての活動とその反軍国主義を十分に扱うことができなかったし、また彼の名が現在にまで知られるきっかけとなったノーベル平和賞受賞（1936年度）につながる活動についても簡単に触れるのみであった。本稿はしたがって、平和主義者のなかでアウトサイダーであったオシエツキーが、のちにドイツの反軍国主義と「平和のための闘いの象徴」[5]として見なされるようになる過程を明らかにし、ここからヴァイマル共和国期ドイツの平和運動の問題点を探ろうという意図のもと、まずは週刊誌『ヴェルトビューネ（世界舞台）Die Weltbühne』[6]の編集長としてのオシエツキーに注目する。『ヴェルトビューネ』でのオシエツキーの活動は、平和運動の批判者としての彼のあり方を大きく変えるものとなった。

## オシエツキーと『ヴェルトビューネ』

ベルリンで出版された週刊誌『ヴェルトビューネ』は、ヴァイマル共和国時代の最も急進的な左翼知識人の論壇である。同誌は演劇評論家ヤーコプゾーン Siegfried Jacobsohn が1905年に創刊した演劇評論誌『シャウビューネ（舞台）Die Schaubühne』[7]をその前身とし、1918年から1933年まで出版された。『ヴェルトビューネ』誌上で扱われたテーマは、その副題「政治・芸術・経済のための雑誌 Zeitschrift für Politik, Kunst, Wirtschaft」が示すとおり、政党や選挙、外交、戦争責任と賠償金問題、書評、演劇評論、映画評論など、多岐にわたる。各号は平均して40頁ほど、部数は最高で15,000部ほどであった。

『ヴェルトビューネ』が現在までその名を知られる理由のひとつに、その厳しい政治批判がある。ナチスから共産党まであらゆる政党がその対象となり、そしてとりわけ反軍国主義的立場からの国防軍批判は厳しいものであった。シュトレーゼマン Gustav Stresemann のような政治家や、本来『ヴェルト

ビューネ』の寄稿者に近い立場にあった社会民主党も辛辣な皮肉をうけた[8]。『ヴェルトビューネ』が第二次世界大戦後、しばしばヴァイマル共和国の崩壊を招いた「ヴァイマル共和国の墓堀人」[9]として位置付けられるのは、こうした厳しい共和国批判が共和国の基盤を弱めたという解釈からである。ヤーコプゾーン死後に編集長の職を引き受けた[10]オシエツキーのもとでの『ヴェルトビューネ』の政治批判はとくに厳しく、ヴァイマル共和国期の左翼知識人の言論のうち最も急進的だとされた。そのため『ヴェルトビューネ』は創刊者のヤーコプゾーンよりも、オシエツキーや同誌を代表する知識人であったトゥホルスキーKurt Tucholsky の名と共に語られることが多い。

しかし野村彰がトゥホルスキーの政治批判について「トゥホルスキーが攻撃を加えたのは『ワイマール・ドイツ』ではない。あくまでもそれは、『ワイマール・ドイツ』の一部でしかない」[11]と述べたように、『ヴェルトビューネ』もヴァイマル共和国のすべてを攻撃、あるいは否定して壊そうとしたわけではなかった。オシエツキーは明確に共和国保護の立場をとっていたし[12]、『ヴェルトビューネ』の寄稿者であったヒラーKurt Hiller、ゲルラハHellmut von Gerlach、フェルスターFriedrich W. Foerster、シュトレーベルHeinrich Ströbel ら当時の著名な平和主義者も共和国、そして平和のために『ヴェルトビューネ』という舞台で議論したのである。トゥホルスキーの連載「軍事 Militaria」[13]をはじめとする多くの反軍国主義の記事により、『ヴェルトビューネ』は平和組織の機関誌でなかったにもかかわらず、平和主義者のフォーラムとなった。彼らの議論は「国家の中の国家」であるドイツ国防軍のあり方をめぐって展開された。そして同誌の厳しい批判は、平和主義者と国防軍との間にしばしば衝突をもたらしたのである。

以下では、ヴァイマル共和国期の平和運動にとって重要な課題であったこの国防軍への取り組みに関して、オシエツキーと『ヴェルトビューネ』の活動を、とくに彼と同誌をめぐる裁判から検討していくことにする。『ヴェルトビューネ』をめぐる裁判は、いわばオシエツキーのジャーナリストとしての活動の頂点であるがゆえに、彼の伝記[14]では必ず触れられる。しかしこの問題のヴァイマル共和国期の平和運動の脈絡での位置付けが十分なされているとは言えない。したがって本論はオシエツキーと『ヴェルトビューネ』への理解を深めるとともに、この問題を扱うことでドイツ平和運動史を新たな視点から検証すること

にもなるのである。

## 2．ヴァイマル共和国期の平和主義者をめぐる状況 ― 『ヴェルトビューネ』をめぐる裁判

ヴァイマル共和国期の平和主義者の間では、軍事力をどの程度まで認めるかという議論にはさまざまな見解があったが、国防軍を民兵などへ「共和国化」するという目標は広く受け入れられていた。とくにプロイセンの軍国主義とその拡張主義こそが第一次世界大戦勃発の原因であり、ヴァイマル共和国に依然として残存するその伝統が次の世界大戦を引き起こす要因となると認識していた急進派の平和主義者にとってはこの問題は重要であった。彼らは軍備削減とヴェルサイユ条約違反の秘密軍備阻止という目標のために、ジャーナリズムの場で国防軍に対する厳しい批判を行なった。国防軍は裁判によって彼らの言論を封じるという方法で、これに対応した。保守的なヴァイマル共和国期の司法は、こうした平和主義者による国防軍の秘密再軍備暴露の試みに対して、国家反逆罪や侮辱罪の判決を言い渡した。

### 2.1. 「闇の国防軍」と平和主義者

国防軍の秘密再軍備に関する平和主義者の取り組みのひとつに、いわゆる「闇の国防軍（黒色国防軍とも訳される）Schwarze Reichswehr」の問題がある。ドイツ国防軍はヴェルサイユ条約によって陸海軍の人員数をそれぞれ10万、1万5千に縮小され、潜水艦と軍用機を禁止されていた。国防軍統帥部長官ゼークトHans von Seecktはこれを不十分だと見なし、国防省ゲスラーOtto Geßlerの承認を得て予備軍の創設にあたった。これが1921年、キュストリン市でブーフルッカーBruno Ernst Buchruckerによって組織された秘密結社「闇の国防軍」である。この組織には解散させられたフライコール（義勇軍）や右翼の反共和国グループの人びとが集められ、「労働分遣隊Arbeitskommando」などの名称がつけられた。公には彼らの任務は州に存在する管理不能な武器材料を調査収集し、ヴェルサイユ条約に従って破壊するために役所に運搬することとされたが、事実上はヴェルサイユ条約に違反する国防軍の予備軍であり、反乱鎮圧の武力団体であった。彼らと国防軍との関係は秘密にされた。しかし闇の国

防軍と国防軍とは、指揮系統も一本化されていた。闇の国防軍に命令を下すのはシュルツ中尉 Paul Schulz であったが、そのシュルツに命令を下していたのはカイナー大尉 Walter Keiner をはじめとする国防軍管区司令部の幹部であった。闇の国防軍は 1923 年夏、ルール地方に派遣され、フランスへの抵抗の一翼を担ったが、同年 9 月にルール闘争が中止されると、ブーフルッカーはこれを不満としてキュストリンの要塞を占領し一揆を起こして、ゼークトの指揮する国防軍によって鎮圧された。ブーフルッカーは降伏、彼やその部下は国家反逆罪で禁固刑に処せられ、闇の国防軍は解体した[15]。

多くの平和主義者たちが、闇の国防軍と国防軍による秘密再軍備問題の解明に積極的に取り組んだ。1924 年には、ドイツ平和協会やドイツ平和カルテルの代表であったクヴィッデ Ludwig Quidde が「月曜の世界 Welt am Montag」紙上に掲載された国防軍の違法な軍備拡張を示唆する記事により、バイエルン当局に拘留された。彼はイギリスの申し入れにより釈放され、彼に対する国家反逆罪での告訴は取り消されている[16]。また、ドイツ平和協会の機関紙「もうひとつのドイツ Das Andere Deutschland」上でのヤーコプ Berthold Jacob とキュスターFritz Küster による闇の国防軍暴露の取り組みも、国家反逆罪として訴えられた。両者とも 9 ヶ月の禁固刑の判決をうけたが、のちに恩赦をうけている。これ以外にも、ドイツ人権協会 Deutsche Liga für Menschenrechte などの平和組織が闇の国防軍の解明に取り組んだ[17]。

## メルテンスの「フェーメ殺人」関連記事

この闇の国防軍内では、内部の「裏切り者」に対する秘密裏の粛正、いわゆる「フェーメ殺人 Fememord」が横行していた[18]。ここでは「上役のほんのわずかな不信でも、最小限の誤解でも機会をうかがっている野獣には噛みつくのに十分」[19]であると言われるほど、多くの殺人が行なわれた。

1925 年 8 月、闇の国防軍の内情を暴露する匿名記事が『ヴェルトビューネ』に掲載される[20]。筆者はメルテンス Carl Mertens[21]という人物で、かつて自身が闇の国防軍に所属していた体験を明かしたのだった。「私がそこで見たのは、最低の信念ともっとも卑しい情熱の泥沼であり、殺人の欲望と冷笑的な態度からなる雰囲気であった。私は恐ろしくて逃げようとした」[22]と彼は述べている。

闇の国防軍の中では、組織を抜けようとしたものは、それがただ家を恋しがっただけだとしてもフェーメの対象となる。メルテンスはこうした様子を次のように述べた。

「あのような厳格に指揮された組織の新入りであった私は、(組織の) 独自の裁きの方法についてなど何も知らなかった。ある晩私は仲間の部屋に行った。すぐさまぴりぴりとした緊張感に襲われた。彼らはささやきながら、隊をなしてやってきた。分遣隊の指導者が側を走って通り過ぎた。粗野な傭兵のような顔立ちの彼は、嘲笑的ににやにやと笑っていたが、(同時に) 神経質そうな不安もみせていた。探るように彼は男たちを見渡した。“誰だ”―― おずおずと発せられたその問いは、普段なら楽しげで溌剌とした青年たちの列の間に震えて届いた。誰も声を出して答える勇気がなかった。それが自分自身であるという恐怖のために。
何が起きているのだろうか。奇妙な緊張感が私にも伝わってきた。一体何が起きているのか。そして私はそれを理解した ―― 不安がざわざわと私を襲った。初めて私は気がついた。私が誤った祖国愛の犠牲者であるということに。初めて私は、私に巻きついたこの鎖から解き放たれることを望んだ。」[23] (引用文中の括弧は引用者による。以下同様)

メルテンスは「ドイツは死体と人殺しと埃まみれの裁判書類で汚されている」[24]と述べ、フェーメ殺人の解明を要求した。彼は警察の対応の遅さを批判し[25]、また内情を知るものとして、闇の国防軍の組織編制や解体の事情を明らかにし、闇の国防軍を始めとする愛国団体に資金提供を行なっている政治家たちを批判した[26]。

彼は個々のフェーメ殺人の例を『ヴェルトビューネ』誌上で数回にわたりくわしく紹介した。彼の報告はフェーメ裁判の証拠書類として使用された[27]。メルテンスの『ヴェルトビューネ』上でのこれら一連のフェーメ関連記事と、彼の著書『反逆者とフェーメ殺人者 Verschwörer und Fememörder』[28]は大きな反響を呼び起こし、彼と『ヴェルトビューネ』を、ジャーナリズムによる闇の国防軍およびフェーメ殺人事件解明キャンペーンの最先端においた。「ベルリーナー・フォルクスツァイトゥング (ベルリン民衆新聞) Berliner Volkszeitung」

や『ターゲ・ブーフ（日記）Das Tage-Buch』のようなリベラルな新聞・雑誌もこれにつづいた[29]。しかししだいにドイツの社会でフェーメ殺人への関心が薄れていく。こうしたなかでも、メルテンスは「ドイツの事情では、今もなおこの殺人の償いを要求しても無駄なのかもしれない。しかし繰り返し警告することが無駄であってはいけない。闇の国防軍の大量殺人者たちに関しては、これを変えていこう」[30]と述べ、警告することの重要性を説いた。しかし彼はこれにより国家反逆罪で告訴され、亡命を余儀なくされた。オーストリア、スイスを経てパリで反軍国主義の言論活動を続けることになるのである。

ヤーコプの「シュルツのための弁明」

メルテンスの闇の国防軍関連記事は、当時まだヤーコプゾーンが編集長であった時代の『ヴェルトビューネ』の反軍国主義の姿勢を周囲に知らしめた。オシエツキーが編集長になると、同誌の国防軍批判はさらに厳しいものになる。ここでは『ヴェルトビューネ』の多くの取り組みのうち、ふたつの例を挙げる。

メルテンスとともに国防軍批判を展開していたヤーコプ[31]は、1927 年 3 月 22 日『ヴェルトビューネ』誌上に記事「シュルツのための弁明 Plaidoyer für Schulz」[32]を書いた。

この背景にはフェーメ殺人の実行犯だけでなく、「命令を下したもの」に対しても捜査の手がのび、その結果シュルツ中尉に対する裁判が開始されたことがある。シュルツはキュストリン蜂起後逃走していたが、1925 年 3 月に拘留され、1927 年 3 月になって殺人教唆の罪で死刑判決をうけた。

「そう —— 我々は悪名高い頭目、シュルツ中尉を弁護する」[33]。「シュルツのための弁明」はこのように始まる。ヤーコプは、フェーメ殺人に対する審理は非公開のまま行なわれており、その司法処理に問題があることを指摘する。そしてシュルツに対する裁判が、国防軍による多くのフェーメ殺人を隠蔽するためのものであることを示唆し、シュルツに対する公正な裁判を要求したのであった。国防軍幹部を名指しで告発したのである。

「我々は左翼の反対者に対する特別裁判を拒否するのと同様、フェーメ関係者に対する特別裁判にも異議を申し立てる。シュルツにはきちんとした

裁判官を要求する権利がある。しかし（シュルツ）中尉はただ与えられた命令を実行しただけであり、被告席には彼の隣に少なくともカイナー大尉とフォン・ボック大佐、そしておそらくはフォン・シュライヒャー大佐とフォン・ゼークト将軍も座るべきだということを、忘れてはならない。」[34]

国防相ゲスラーはこの記事が国防軍を中傷するものであるとして、執筆者のヤーコプと編集責任者のオシエツキーを告訴した。オシエツキーはヤーコプの記事が掲載されたときは実際はまだ編集長ではなかったにもかかわらず、罪に問われた。裁判は 1927 年 12 月 16 日から 21 日にかけて、シャルロッテンブルク参審裁判所で行なわれた。そして侮辱罪によりヤーコプに禁固 2 ヶ月、オシエツキーに禁固 1 ヶ月の判決が言い渡されたのである[35]。裁判所は罰金刑ではなく、禁固刑を言い渡した。数々のフェーメ殺人に関する裁判で明らかにされているような国防省の道義的責任があるかどうかについては、裁判所は決定を保留にしたのであった[36]。

この判決に対するオシエツキーの反論が「フェーメ裁判 Der Femeprozeß」[37]である。彼はこのなかで裁判の様子を明らかにしている。それによると、裁判長クローネ Wilhelm Crohne は、開廷後すぐにオシエツキーたち被告を恫喝し、彼らに発言を許さず、一方的に裁判をすすめた。事情聴取はまともに行なわれなかった。オシエツキーはこうした裁判の不公正さを批判しつつ、それへの対決姿勢を示している。

「今日、明日、明後日にも、我々に有罪の判決が下されるだろう。我々はそれを受けいれるだろう。しかしそのために我々の誇りが「改良される」などということはなく、（この誇りは）さらに精力的で、鋭く、濃い、そしてより強靭なものになるだろう。そのために我々ジャーナリストは存在しているのであり、世の中のために働いているのである。」[38]

裁判所と国防軍が結びつき、司法による言論弾圧が厳しくなるなかで、オシエツキーは民衆の護民官たるべきジャーナリストの姿を示そうとしたのであった。また「東部国境に存在していた不法な国防部隊」、つまりかつての闇の国防軍の存在を、裁判所が隠蔽したまま審理をすすめていったことも彼は鋭く批判

したのである[39]。

この判決に対するオシエツキーらの申し立てにより、1928 年 4 月にベルリン第 3 地方裁判所で控訴審が行なわれた。ここではヤーコプに 1,000 マルク、オシエツキーに 600 マルクの罰金の判決が下された[40]。しかしこれは結局、恩赦によって執行されることはなかった。この背景には、国防軍とフェーメ殺人の判決に対する世論の追求のたかまりがあった。

しかしこの一方で、フェーメ殺人事件で闇の国防軍の背後にあった国防軍幹部が刑事責任を追及されることはなかった。殺人の実行犯で死刑を宣告されていたものは恩赦によって終身刑に減刑され、さらに 1928 年 7 月 14 日には 7 年半の禁固刑に減刑、そして結果的に多くが恩赦により釈放された。シュルツは 1929 年 6 月 28 日に健康上の理由で釈放され、フェーメ殺人に関する判決はほぼ無効となった[41]。

しかしながら、ドイツの左派ジャーナリズムとそして国防軍幹部を巻き込んだ『ヴェルトビューネ』の闇の国防軍とフェーメ殺人に対する取り組みは、同誌の反軍国主義的姿勢をヴァイマル共和国の社会に示すこととなった。そしてそれにより『ヴェルトビューネ』は国防軍の敵視の対象になる。国防軍による『ヴェルトビューネ』弾圧の試みはつづく。1927 年には『ヴェルトビューネ』に掲載された記事「カナリスの秘密 Das Geheimnis Canaris」[42]「カナリス島の童話 Das Märchen von den Canarischen Inseln」[43]に対して、軍事機密漏洩の疑いのため調査が行なわれたが、これは漏洩の証拠がなく失敗している。

## 2. 2. 『ヴェルトビューネ』裁判

「ドイツ航空事業のあやしげな点」

『ヴェルトビューネ』と国防軍との対決の頂点が「『ヴェルトビューネ』裁判 Der Weltbühne-Prozeß」である。裁判の契機となったのは、1929 年 3 月 12 日に同誌に掲載されたクライザーWalter Kreiser の記事「ドイツ航空事業のあやしげな点 Windiges aus der deutschen Luftfahrt」[44]であった。ハインツ・イェーガーHeinz Jäger というペンネームで書かれたこの記事は、航空問題専門のジャーナリスト、クライザーによる秘密軍備暴露の記事であった。

クライザーはこの記事の中で、海軍から資金がルフトハンザに流れていることを指摘し、ルフトハンザの海外事業がドイツ国防軍の軍事力を強化するためのもので、秘密の戦闘訓練が外国の領空でも行なわれている可能性があることを示唆した。ルフトハンザの海軍航空部は海軍の諸組織を隠すための部門であり、ルフトハンザに存在する「M 課」の「M」は Militär、つまり「軍事」をあらわすイニシャルであると述べた[45]。

国防軍の対応

1929 年 8 月からクライザーと編集責任者であるオシエツキーに対する軍事機密漏洩と国家反逆罪の訴訟準備が開始された。訴訟の準備には 2 年の年月がかけられた。その背景には、国防軍、外務省、司法の間の意見の対立がある。是が非でもオシエツキーらを有罪にしたいという意図を国防軍が持っていたのに対して、外務省にはドイツの秘密軍備に対して当時すでに起こっていた国際的批判を回避したいという意図があった。オシエツキーとクライザーを国家反逆罪および軍事機密漏洩の罪に問えば、クライザーの記事の内容を事実と認めたことになる。これはつまりドイツがヴェルサイユ条約違反の再軍備を秘密裏に行なっているということを公的に認めることになるのである。1931 年 6 月 21 日に予定されていた初公判が中止されたのは、外務次官ビュローBernhard Wilhelm von Bülow の介入によるものであった。

これに対して積極的に裁判をすすめようとしたのが国防軍の実力者であったシュライヒャーKurt von Schleicher であった。彼は、外務省と国防省が一丸となって国家反逆罪に対抗するよう、ビュローに呼びかけたのである。シュライヒャーにはこの裁判を今後の軍事機密漏洩を防止するための先例にしたいという意図があった[46]。しかし外務省はそれでもなお外交政策への影響を考慮し、この裁判に対する明確な態度表明をすることができなかったのである。

裁判は「安全保障政策上の」理由から傍聴禁止で行なわれ、被告と弁護人には黙秘義務が課せられた。オシエツキーの弁護側の証人 19 人は、すべて拒否された。判決は 1931 年 11 月 23 日に下された。ライプツィヒ第 4 裁判所刑事部は、オシエツキーとクライザーの両名に対して禁固 18 ヶ月を言い渡したのであった。判決理由は「1914 年 7 月 3 日の軍事機密漏洩に対する法律第 1 条

第 2 項」違反[47]、国家反逆罪である。この法律は戦時のスパイ条項であった。是が非でもオシエツキーたちを有罪にするために、強引に持ち出された法律だったといえる。

判決に対する反応

オシエツキーと『ヴェルトビューネ』はこの判決に抗議の姿勢をみせた。『ヴェルトビューネ』誌上にはオシエツキーを支持し、裁判を批判する文章が多く掲載される。トゥホルスキーはこの裁判を「魔女狩り」[48]と呼んだ。さらに『ヴェルトビューネ』は判決後すぐに、ドイツペンクラブやドイツ人権協会と協力してオシエツキーの恩赦および減刑請求を呼びかけた。『ヴェルトビューネ』には数回にわたり署名運動のための名簿が入れられた。また抗議集会も行なわれた。1931 年 12 月には大統領ヒンデンブルク Paul von Hindenburg に対して、オシエツキーのための減刑嘆願書が提出された。トーマス・マン Thomas Mann ら著名な知識人もこれに名を連ねている。マンもトゥホルスキーと同様に、ライプツィヒ裁判所の判決を不当な政治弾圧であると抗議した[49]。だが、ヒンデンブルクは 1932 年 4 月に恩赦の拒否を決定した。

1932 年 5 月 10 日にオシエツキーがベルリンのテーゲル刑務所に入獄してからも、釈放をもとめる運動は続く。ドイツ人権協会などによる釈放要求の署名運動には 7,000 の団体や協会、さらに 43,000 の個人が参加し[50]、再びヒンデンブルクへ恩赦が請願された。しかし、これも拒否された。これには 1932 年 3 月に行なわれた大統領選でのオシエツキーによるヒンデンブルク批判が影響していた。この選挙でオシエツキーは、ヒンデンブルクに投票することはヒトラーに投票することであるとし、共産党党首テールマン Ernst Thälmann への支持を呼びかけていたのであった。これが反感をかったことは明らかであった。オシエツキー自身は、ヒンデンブルクの恩赦拒否の決定に対し、彼の態度はわからなくもないと皮肉を述べている[51]。そしてさらに『ヴェルトビューネ』の国防軍批判はつづいた。例えば同年 5 月 17 日には、去る 5 月 12 日まで内相と国防相を兼任していたが失脚したグレーナーWilhelm Groener に宛てた文章が掲載されている。ここでは「軍事政策の犠牲者、カール・フォン・オシエツキーの後ろで刑務所のドアが閉まったその二日後、あなたは、あなたの職場の野心

的な将軍たちによって失脚させられました。私たちをあんなにも激しく迫害するかわりに、私たちの書いたものをもっと注意深く読んでいたほうがよかったのかもしれません」[52]と皮肉たっぷりに書かれたのであった。

各新聞も判決後すぐにこの裁判に関する記事を掲載している。「ベルリーナー・フォルクスツァイトゥング」は、この判決を「恐ろしい判決」とよび、この判決によって国防軍を批判する言論が今後容赦なく弾圧されることになるだろうと書いた[53]。また「フォアヴェルツ（前進）Der Vorwärts」も「ドイツにおける出版の自由の名のもとに、ドイツのあらゆる共和主義者の名のもとに」裁判所に対して抗議運動を行なうと主張したのであった[54]。しかし判決に抗議する新聞ばかりではなかった。右派の「ドイッチェ・アルゲマイネ・ツァイトゥング（ドイツ一般新聞）Deutsche Allgemeine Zeitung」は、クライザーの記事は世間でいわれているようなドイツ軍国主義批判の記事ではないとし、これは平和主義者たちの国家反逆罪にすぎないのだから、禁固1年半という厳しい判決は妥当であるとした[55]。

『ヴェルトビューネ』裁判はこのように左右両派を巻き込んだ。さらに反響はドイツ国内にとどまらなかった。イギリスの「タイムズ The Times」紙は、この裁判が非常に厳しいものであり、ドイツの言論の自由が徐々に失われつつあるようだと指摘した[56]。また他にも「マンチェスター・ガーディアン Manchester Guardian」紙や「ニューヨーク・タイムズ The New York Times」紙をはじめ、イギリス、フランス、オランダ、スイス、オーストリア、チョコスロヴァキアなどの国々の新聞がこの判決を批判したとされている[57]。

## オシエツキーの態度表明

オシエツキーは判決後まもなくの1931年12月、「『ヴェルトビューネ』裁判 Der Weltbühnen-Prozeß」という題の記事で次のように述べている。

> 「一年半の禁固刑。それほどひどくはない。というのも、ドイツの自由がそれほどたいしたものではないからだ。拘禁されているものと拘禁されていないものとの間の違いは次第に無くなってきている。激動の時代に自らの信念に従うジャーナリストは誰でも、自分が危険にさらされて生きてい

ることを知っているのだ。」[58]

そしてオシエツキーは 1932 年 5 月 10 日、『ヴェルトビューネ』に「弁明 Rechenschaft」[59]を掲載する。この日は彼がテーゲル刑務所へ入獄する日であった。「私は刑務所に入らなければならない」[60]という文で始まるこの「弁明」は、彼の態度表明であり、彼を支援してくれる人びとに対する返答であった。

オシエツキーの多くの文章のうちで最もよく引用されるこの「弁明」は、ヴァイマル共和国期末期の平和主義者が抱えていた諸問題を如実にあらわしている。それは、反軍国主義とのたたかい、司法と国防軍による平和主義者の言論弾圧とのたたかい、週刊誌という舞台で活動する平和主義的ジャーナリストとしてのあり方、そして亡命の問題である。

1932 年当時のドイツの状況は平和主義者には大変厳しいものであった。政府に対して、そして国防軍に対して容赦ない批判を繰り返していた『ヴェルトビューネ』は、敵視されていた。当時の最も急進的な雑誌『ヴェルトビューネ』の編集長としてすでに著名であったオシエツキーは、以前から彼の身の危険を案じた友人たちから亡命を勧められていた。しかし彼は亡命するよりも敢えて刑に服することが、むしろ裁判に対するより効果的な抗議となりうると考えたのである。オシエツキーは「弁明」で、自分には亡命の意思がないことを表明し、それを彼に亡命を勧める友人たちに対する答えとしたのである。そして同時に、彼の考える平和主義的ジャーナリストの義務を述べた。

> 「国境を越えてしまった反対者は、すぐ故国に呼びかけてもその声はうつろである。専ら政治的ジャーナリストとしてのみ生きるものは、長い間には、自らが反対するもの、あるいは賛成するものすべてに関わらないでいると、どうしても非常な興奮状態（をともなった対応）や過ちに陥ってしまう。一国の汚染された精神と効果的に戦おうとするならば、その国全体の運命を担わなければならない」[61]。

オシエツキーはこの文章で、自分が刑務所に入っていくことについて「弁明」しようとしたのであった。彼の論旨は次のようになる。自分は判決への服従心から刑務所に入るのではない。裁判所と判決に対抗するためのデモンストレー

ションとして刑務所に行くのである。自分のことを支援してくれる人びとのためにも、また自分と同じように第 4 裁判所刑事部で有罪にされたプロレタリアートの無名の犠牲者たちのためにも、この抗議はやりとげられなければならないのである[62]。つまり彼は、『ヴェルトビューネ』裁判に対してドイツ国内だけでなく諸外国からの注目の集まる中、自身が刑務所での服役の日々を耐えることによって、反軍国主義キャンペーンを行なおうとしたのであった。

オシエツキーはこうした信念から、フランスへ亡命したクライザーに対して批判的にならざるをえない。クライザーは『ヴェルトビューネ』裁判についての情報をフランスの国家主義的新聞『レコ・ドゥ・パリ（パリのこだま）L'Echo de Paris』に提供し、ここからドイツ軍国主義を批判を行なった。オシエツキーは、クライザーのように外国へ行ってしまっては「敵方についた」と受け取られる。これでは「国家反逆罪」や「軍事機密漏洩罪」という罪を認めることになり、国防軍や裁判所の望みどおりになる。クライザーは「レコ・ドゥ・パリ」に書いたことで、結局はドイツの軍国主義に手を貸してしまったのであると批判したのであった[63]。

さらにオシエツキーは軍国主義とのたたかいの手を緩めない。彼は「軍事の優位に対するたたかいが共和国でいつかまた始まるときがくるだろう。いつなのか　―　今日はまだそのための地固めはできていない。（中略）我々はそれほど長く待つ必要はない。政治化した将校たちが持っている全能であるという意識を弱めさせること、これが、国家、つまりあるべき姿の国家やあればよいという（理想の）国家ではなく、あるがままの（現在の）国家の今日の課題である」[64]と述べている。この文章は翌週の『ヴェルトビューネ』に「今日の課題 Die aktuelle Aufgabe」[65]という題で再掲された。ここからは『ヴェルトビューネ』の決然とした態度が明らかになる。

オシエツキーは『ヴェルトビューネ』を代表して軍国主義批判を行なうことで、平和主義者の軍国主義批判を代表する人物となった。オシエツキーが『ヴェルトビューネ』をめぐる裁判にかかわり、敢えて入獄したことはドイツ社会の関心を彼にむけさせることになった。そして他の平和主義者たちが徐々に亡命をはじめるなかで、彼が亡命を拒否しドイツにとどまったことは、その是非を越えて、彼に反軍国主義の闘士という像を与えたのであった。また、デモンストレーションとして刑務所に入ったオシエツキーは、この役割を十分自覚して

いたと言えよう。1932年5月10日の「ベルリーナ・フォルクスツァイトゥング」紙はオシエツキーを「自由のための闘士」と呼び、彼がその自覚を持って刑務所に入ると報道している。また彼の事件が国境を越えて人々の関心を引いているのを、彼自身が幸運と見なしているとも書いている[66]。

## 3．おわりに

国防軍による秘密再軍備の問題は、ヴァイマル共和国期の平和主義者にとって最も憂慮すべき問題であった。彼らの厳しい国防軍批判と秘密再軍備の暴露は、平和主義者を彼らの復讐の標的にした。『ヴェルトビューネ』はその先頭にたたされたのである。

オシエツキーがテーゲル刑務所に入った1932年ごろには、すでに組織平和運動は衰退に向かっていた。最大時に3万人を数えたドイツ平和協会は、急進派と穏健派の闘争により穏健派の大部分の会員を失っていた。平和組織は解体の方向に向かっていた。平和主義者のなかにはドイツを離れる決心をするものもいた。『ヴェルトビューネ』裁判をめぐるオシエツキーと同誌の平和主義者たちの取り組みは、ヴァイマル共和国期の平和運動史のなかで、最後の大きな活動であった。

『ヴェルトビューネ』をめぐる諸裁判は、平和主義者を追い詰める一方で、同誌の反軍国主義の姿勢をさらに明確に示すこととなった。オシエツキーが『ヴェルトビューネ』を代表して裁判に臨み、そして自ら入獄していく過程からは、国防軍と司法にとっての対決すべき対象としての平和主義者＝『ヴェルトビューネ』像が浮かび上がる。一方ここからは同時に、平和組織と与することができず批判者として位置し、アウトサイダーを自認していたオシエツキーが、ドイツの反軍国主義の先頭に立つということが、組織平和運動が機能しなくなっていたヴァイマル共和国期末期の平和主義者をめぐる厳しい状況を反映していることも理解できるのである。

1932年12月22日オシエツキーは、クリスマス恩赦によりテーゲル刑務所から出所した[67]。5日後の『ヴェルトビューネ』には、彼の文章「帰還 Rückkehr」[68]が掲載された。オシエツキーが次に逮捕されたのは、1933年2月28日、国会議事堂炎上事件の際であった。第二次世界大戦後のドイツの平和観にまで関わっ

てくる[69]オシエツキーの平和主義と彼に対する様々な評価は、オシエツキーがナチスと取り組むことを余儀なくされたとき、つまり 1933 年以降、平和主義者がドイツを離れる中で彼が強制収容所に入れられたとき、そして彼のノーベル平和賞受賞の事情を見るとき、さらに明らかになってくる。なお追加の考察が必要である。

---

1 Karl Holl, *Pazifismus in Deutschland*, Frankfurt am Main 1988; Friedrich-Karl Scheer, *Die Deutsche Friedensgesellschaft (1892-1933). Organisation, Ideologie, politische Ziele*, Frankfurt am Main 1981; Reinhold Lütgemeier-Davin, *Pazifismus zwischen Kooperation und Konfrontation. Das Deutsche Friedenskartell in der Weimarer Republik*, Köln 1982 など。

2 ヴァイマル共和国期のドイツの平和運動については、武田昌之「ヴァイマル期における平和主義」(『歴史学研究』第 550 号、1986 年 1 月) および竹本真希子「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」(『歴史学研究』第 786 号、2004 年 3 月) を参照のこと。

3 オシエツキーCarl von Ossietzky(1889-1938)はハンブルク生まれのジャーナリスト、平和主義者。『ベルリーナー・フォルクスツァイトゥング』紙、『ターゲ・ブーフ』誌などに勤めたのち、『ヴェルトビューネ』に移る。1933 年ナチスに逮捕され、強制収容所に送られる。1935 年度のノーベル平和賞を受賞。1994 年にはオシエツキーの全集が公刊されている。Carl von Ossietzky, *Sämtliche Schriften*. Hrsg. v. Gerhard Kraiker / Gunther Nickel / Renke Siems / Elke Suhr, 8 Bde., Reinbek bei Hamburg 1994. 本稿では以下 *OSS* (= Ossietzkys Sämtliche Schriften) と略し、オシエツキーの『ヴェルトビューネ』での記事については、全集での掲載箇所も付しておく。

4 竹本前掲「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」。

5 同上、18 頁。

6 *Die Weltbühne. Wochenschrift für Politik, Kunst, Wirtschaft.* Hrsg. v. Siegfried Jacobsohn, später Carl von Ossietzky und Kurt Tucholsky, Berlin 1918-1933, Vollständiger Nachdruck, Königstein/Ts. 1978. (以下註では *WB* と略。)『ヴェルトビューネ』に関する研究については、竹本真希子「パンヨーロッパ運動と『ヴェルトビューネ』」(『専修史学』第 36 号、2004 年 3 月) を参照。

7 *Die Schaubühne.* Hrsg. von Siegfried Jacobsohn, Berlin 1905-1918, Vollständiger Nachdruck, Königstein/Ts. 1979-1980.

8 『ヴェルトビューネ』と同誌のライバル誌であった『ターゲ・ブーフ』のシュトレーゼマンに関する記事については、竹本真希子「ヴァイマル共和国の平和主義的知識人とシュトレーゼマン　—週刊誌『ヴェルトビューネ』と『ターゲ・ブーフ』の記事を中心に—」(西川正雄・青木美智男監修『近代社会の諸相　—個・地域・国家—』、ゆまに書房、2005 年 11 月)、51-81 頁。

9 Rudolf Augstein, „Eine Republik und ihre Zeitschrift. Rudolf Augstein zur Neuauflage der „Weltbühne"", in: *Der Spiegel*, 16.10.1978, S.239.

10 ヤーコプゾーンが急死したのち、一時期であるがトゥホルスキーも編集長をつとめている。しかし彼が編集作業を好まず、またパリをはじめとしてヨーロッパ中を飛び回りベルリンに常駐することを拒んだことから、オシエツキーが編集長の職を引き受けた。

11 野村彰「クルト・トゥホルスキーとワイマール時代」(クルト・トゥホルスキー／ジョン・ハートフィールド『ドイツ　世界に冠たるドイツ　―― ≪黄金≫の二〇年代・ワイマール時代の鏡像』(ありな書房、1982年)、289頁。
12 竹本前掲「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」27-29頁。
13 Ignaz Wrobel (= Kurt Tucholsky), „Offizier und Mann (I. Offizier und Mann)", in: *WB*, I, 9.1.1919; ders., „Militaria (II. Verpflegung)", in: *WB*, I, 23.1.1919; ders., „Militaria (III. Von großen Requisitionen)", in: *WB*, I, 30.1.1919; ders., „Militaria (IV. Von kleinen Mädchen)", in: *WB*, I, 6.2.1919; ders., „Militaria (V. Vaterländischer Unterricht)", in: *WB*, I, 13.2.1919; ders., „Militaria (VI. „Unser Militär")", in: *WB*, I, 20.2.1919.「Militaria」のタイトルがつけられたのは連載2回目から。
14 オシエツキーの伝記としては Elke Suhr, *Carl von Ossietzky. Eine Biographie*, Köln 1988; Kurt R. Grossmann, *Ossietzky. Ein deutscher Patriot*, München 1963 (Neudruck, Frankfurt am Main 1973)など。邦語では、加藤善夫『カール・フォン・オシエツキーの生涯　－ドイツ・ワイマル時代の政治的ジャーナリスト－』(晃洋書房、1996年)。
15 闇の国防軍とフェーメ殺人およびその裁判については、清水誠(編)『ファシズムへの道　ワイマール裁判物語』(日本評論社、1978年)、45-60頁を参照。
16 Karl Holl, „Quidde", in: Helmut Donat / Karl Holl (Hrsg.), *Die Friedensbewegung. Organisierter Pazifismus in Deutschland, Österreich und in der Schweiz*, Düsseldorf 1983, S.317.
17 Otto Lehmann-Russbüldt, *Der Kampf der Deutschen Liga für Menschenrechte vormals Bund Neues Vaterland für den Weltfrieden 1914-1927*, Berlin 1927, S.115ff.
18 「フェーメ」いう言葉は元々中世に行われた秘密裁判を意味する。
19 *** (= Carl Mertens), „Die Vaterländischen Verbände", in: *WB*, II, 18.8.1925, S.256.
20 Mertens, „Die Vaterländischen Verbände".
21 メルテンス Carl Mertens (1902-1932) は書籍商およびジャーナリスト。第一次世界大戦直後は右翼団体や「闇の国防軍」に加入していたが、脱退。1925年にドイツ人権協会に加盟。フェーメ殺人と国防軍批判の記事により国家反逆者として逮捕される前に亡命。パリでフェルスターとともに反軍国主義の言論活動を続けた。メルテンスについては Helmut Donat, „Carl Mertens", in: Donat / Holl, *Die Friedensbewegung*, S.271f. メルテンスの記事は最初の寄稿からしばらくの間、「＊＊＊」で名を伏せられて掲載された。1926年3月にこの筆者がメルテンスであることが明かされた。Carl Mertens (***), „Der Rattenkönig", in: *WB*, I, 2.3.1926.
22 Ebenda, S.239.
23 Ebenda, S.256f.
24 *** (=Carl Mertens), „Ein vergessener Mord", in: *WB*, I, 5.1.1926, S.17.
25 *** (=Carl Mertens), „Von den Fememorden", in: *WB*, I, 19.1.1926, S.87.
26 資金の問題については、***(=Carl Mertens), „Feme-Ausschuß", in: *WB*, I, 2.3.1926, S.353.
27 Mertens, „Die Vaterländischen Verbände", S.258.
28 Carl Mertens, *Verschwörer und Fememörder*, Charlottenburg 1926.
29 Stefanie Oswalt, *Siegfried Jacobsohn. Ein Leben für die Weltbühne*, Gerlingen 2000, S.190.
30 Mertens, „Ein vergessener Mord", S.18.
31 ベルトルト・ヤーコプ Berthold Jacob (1898-1944) はジャーナリスト。本名はベルトルト・ザロモン Berthold Salomon。『ベルリーナー・フォルクスツァイトゥング』ではオシ

エツキーとともに活動し、同紙の記者を中心として結成された「ニー・ヴィーダー・クリーク運動」に参加。1932 年に亡命。1941 年にゲシュタポに逮捕され、強制収容所に送られたのち、1944 年にナチスによって殺害された。1937 年にはオシエツキーの伝記を出版している。Berthold Jacob, *Weltbürger Ossietzky*, Paris 1937. ヤーコプについては、Reinhold Lütgemeier-Davin, „Berthold Jacob", in: Donat / Holl, *Die Friedensbewegung*, S.204f および Ruth Greuner, *Gegenspieler. Profile linksbürgerlicher Publizisten aus Kaiserreich und Weimarer Republik*, Berlin (DDR) 1969, S.313-343 を参照。

32 Berthold Jacob, „Plaidoyer für Schulz", in: *WB*, I, 22.3.1927.「Plaidoyer」は原文のまま。

33 Ebenda, S.446.

34 Ebenda, S.449f.

35 „Urteil zum «Femeprozeß», 20.12.1927", in: *OSS*, Bd.VII, [D205], S.250.

36 Raimund Koplin, *Carl von Ossietzky als politischer Publizist*, Berlin / Frankfurt am Main 1964, S.121.

37 Carl v. Ossietzky, „Der Femeprozeß", in: *WB*, II, 27.12.1927, (in: *OSS*, Bd.IV, [748]).

38 Ebenda, S.953.

39 Ebenda, S.952.

40 O.V. (= Ohne Verfasserangabe), „Antworten", in: *WB*, I, 24.4.1928, S.658.

41 清水前掲『ファシズムへの道』60 頁。

42 Oliver, „Das Geheimnis Canaris", in: *WB*, II, 23.8.1927, S.285-289.

43 O.V., „Das Märchen von den Canarischen Inseln", in: *WB*, II, 22.11.1927, S.775-777.

44 Heinz Jäger (= Walter Kreiser), „Windiges aus der deutschen Luftfahrt", in: *WB*, I, 12.3.1929.

45 Ebenda, S.402-407.

46 „Generalmajor von Schleicher an von Bülow, 9.7.1931", in: *OSS*, Bd. VII, [D261], S.323f.

47 „Urteil im «Weltbühnen-Prozeß», 25.11.1931", in: *OSS*, Bd. VII, [D269], S.345.

48 Kurt Tucholsky, „Für Carl v. Ossietzky. General-Quittung", in: *WB*, I, 17.5.1932, S.734.

49 O.V., "Eingabe an den Herren Justizminister von Max Alsberg", in: *WB*, I, 17.5.1932, S.741f.

50 Karol Fiedor, *Carl von Ossietzky und die Friedensbewegung. Die deutschen Pazifisten im Kampf gegen Wiederaufrüstung und Kriegsgefahr*, Wrocław 1985, S.78.

51 Carl v. Ossietzky, „Rechenschaft", in: *WB*, I, 10.5.1932, S.689 (in: *OSS*, Bd.VI, [1058]).

52 O.V., „Antworten (General Groener)", in: *WB*, I, 17.5.1932, S.761.

53 „Die «Berliner Volks-Zeitung» zum Urteil im «Weltbühnen-Prozeß», 23.11.1931, M", in: *OSS*, Bd.VII, [D272], S.360.

54 „Der «Vorwärts» zum Urteil im «Weltbühnen-Prozeß», 25.11.1931", in: *OSS*, Bd.VII, [D279], S.370.

55 „Die «Deutsche Allgemeine Zeitung» zum Urteil im «Weltbühnen-Prozeß», 23.11.1931", in: *OSS*, Bd.VII, [D270], S.358f.

56 The Times, November 24, 1931.

57 Grossmann, *Ossietzky*, S.203.

58 „Carl von Ossietzky, „Der Weltbühnen-Prozeß"", in: *WB*, II, 1.12.1931, S.805 (in: *OSS*, Bd.VI, [1031]).

[59] Carl v. Ossietzky, „Rechenschaft".
[60] Ebenda, S.689.
[61] Ebenda, S.691.
[62] Ebenda, S.690f.
[63] Ebenda, S.692-696.
[64] Ebenda, S.703f.
[65] Carl v. Ossietzky, „Die aktuelle Aufgabe", in: *WB*, I, 24.5.1932, S.766.
[66] „Die «Berliner Volks-Zeitung» zum Strafantritt, 10.5.1932, A", in: *OSS*, Bd.VII, [D329], S.438.
[67] オシエツキーのテーゲル刑務所での日々に関しては、Stefan Berkholz (Hrsg.), *Carl von Ossietzky. 227 Tage im Gefängnis. Briefe, Dokumente, Texte*, Darmstadt 1988.
[68] Carl v. Ossietzky, „Rückkehr", in: *WB*, II, 27.12.1932, S.925f (in: *OSS*, Bd.VI, [1070]).
[69] 竹本前掲「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」18-19 頁。